

[社 会]

小学校社会科における主体的・対話的で深い学びの 視点からの授業改善

－資料の読解から「思考のずれ」を修正し、問題解決へと導く－

駒谷 泰成*

1 はじめに

昨年度担任した5年生の学級では、学習問題を追求・解決する学習過程で、次のような傾向があった。例えば導入時にグラフを示すと、「〇〇が一番多い」「だんだん増えている」など、活発な発言が見られた。一方、展開やまとめの際に、読み取ったことをもとにして関連させて考えまとめる場面では、「何を書けばよいのかわからない」など、表現できない児童が多かった。地図や統計などの各種の資料から必要な情報を集めて読み取るような、直接比較するものは答えることはできるが、資料をもとに解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することなどに課題が見られた。

文部科学省・国立教育政策研究所がOECD生徒の学習到達度調査2018年調査（PISA2018）のポイントとして公表した日本の結果は、「読解力の自由記述形式の問題において、自分の考えを他者に伝えるように根拠を示して説明することに、引き続き、課題がある。」であった。PISAの定める読解力は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと。」である。この課題は、先に示した学級の実態と同様である。

社会科のテキストである資料を理解・活用し、主体的・対話的で深い学びにつながるような、新学習指導要領のねらいに迫る指導を行いたい。これまでの社会科では、児童に位置や空間的広がり、時期や時間の変化、事象や人々の相互関係の3つの視点をもとに児童自らが問いをもち、その事象がどのような役割を果たしているか自らの生活と関連付けて考えることを目指し全ての児童が資料の内容を確実に理解すること、資料の変化（事実）からその理由を自分なりに考えて表現することができる児童を育てることに主眼を置いている。その一方、知識や読み取った事象が中心となってしまう、先述した3つの視点を児童が生かすことができない課題が挙げられる。授業において、ひとつひとつの資料を関連付けて考える力を取り上げて指導することで、社会的事象をより具体的に考察し、公正な社会的判断を行うような主体的・対話的で深い学びへとつなげられると考えた。

新学習指導要領の第5学年の3指導計画の作成と内容の取扱い1（1）において、「主体的・対話的で深い学び」の視点では、授業改善に向けた配慮事項を、次のように示している。

授業改善に向けた配慮事項

（1）単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、問題解決への見通しをもつこと、社会的事象の味方・考え方を働かせ、事象の特色や意味などを考え概念などに関する知識を獲得すること、学習の過程や成果を振り返り学んだことを活用することなど、学習の問題を追求・解決する活動の充実を図ること。

伊東（2015）は、子どもの資料活用能力を高めるための要因として、①資料に書いてある事実を確認してから読み取り活動を行うこと、②思考のずれを生む資料の提示、③視点の焦点化、転換を促すための働きかけ、の三点を挙げている。②の思考のずれを生む資料の提示では、「子どもが自分の信じている価値観と異なる価値観に出会ったとき、驚きと共に「どうして」という追求意識が生まれる。」としている。

児童の実態からは、資料をもとに解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することなどに課題が見られた。これは、学習の過程や成果を振り返り学んだことを活用することなど、学習の問題を追求・解決する活動の充実を図ることに課題があると考えた。そこで、伊藤の挙げた思考のずれを生むような資料になるよう、教科書の資料を用いて考察させる。資料から、ずれを児童が自ら修正したり、ひとつひとつの資料を関連付けて

*小千谷市立千田小学校

考えるような力を付けたりさせていく。授業を、子どもが資料の読解を通して「思考のずれ」を修正し、問題解決へ向かうような授業へと改善する手立てを追求することにした。

2 研究の目的と方法

子どもは自分の考えを話したり書いたりするときに、これまでの経験をもとにしていることが多い。社会科の学習で求められる力は資料を理解、利用して考えを深めることであり、資料の内容を関連させながら自分の考えにまで深めることである。本研究の目的は、社会科の授業で、児童の思考を深めるために有効な手立てを探ることである。本研究では、児童の記録物の中で、資料の内容を踏まえた記述をしていた人数から効果を検証する。特に、子どもが資料を活用している姿から、その思考の深まりについて見取っていく。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善とするために、以下の3点の手立てに留意して授業を展開することとした。

(1) 学習の見通しをもたせる（予想を立てる）

児童の学習意欲を高めるために「どうして」や「知りたい」という気持ちを高めていく必要がある。これは、子どもに課題を把握させ、これまでの生活経験や既習学習を基に予想し、自分で学習計画を立てるという、問題解決への見通しをもたせていくことである。この見通しをもたせるために、資料にある事実を確認してから読み取り活動を丁寧に行う。

(2) 提示資料の工夫（知識獲得と思考を促す資料の提示）

資料の確実な読み取りを行い、全ての児童が内容を理解した上で予想を立てさせる。その際、社会的事象の味方・考え方を働かせ、事象の特色や意味などを考え概念などに関する知識を身に付けさせていく。ここでは、子どもがこれまでの生活経験では考えていなかったような資料を自作・検討して提示し、児童の思考を促す。

(3) 授業展開の工夫（関わり合いながら学ぶ場の設定）

子どもたちは、調べたことや考えたことを交流することで自分の考えを深めることができる。学習の問題を追求・解決する活動の充実を図るためにかかわりあう場を意図的に設定する。その際、子どもたちに必然性があり、友達と話し合うことで、自分の考えを広げ深めることができるような学習形態になるよう配慮する。

3 授業の実際（令和1年12月 第5学年（男子18名、女子16名）単元名 「わたしたちの食料生産」）

(1) 授業設定の理由

総合の時間に米作りをして、自分たちでお米を育てる経験をした。学習の中で講師として呼び出したお米マイスターさんから、外国の米を見せてもらった。その際に、「やっぱりお米は日本のものの方がいいよな」という声が聞こえた。米以外にも外国の食べ物が自分たちの身の回りにどのくらいあふれているか理解すると、子どもたちの中で驚きと興味が沸くのではないかと考え、授業を設定した。本時のねらいは、日本の食料自給率の低さを資料から読み取り、輸入が増えた理由について考えることである。日本の食料自給率は低く、多くの食料を輸入に頼っていることを理解し、その理由を考える際に、外国産の食料の安さや食料生産の方法が違うことに気付かせるために、資料を用意し授業計画を立てた。

(2) 授業の計画

1 「輸入」という言葉の理解、課題をつかむ

輸入肉と国産肉の写真を見せて、身の回りの食べ物には輸入されたものがあることを理解させる。また、輸入されている食料は昔に比べると増えていることも理解させる。（資料1）

◎日本にたくさんの食料が輸入されているのはなぜだろう？

2 日本の食料自給率の低さを読み取る

米、牛肉、野菜、みそ、パン（小麦）、魚の食料自給率を考える。

①個人で予想を立て、全体で共有する。

②グラフ（資料2）から読み取れることをワークシートに書く。

③全体で食料自給率の低さを確認する。

3 どうして食料自給率が低いのか考える。

①外国の大規模農業の様子と、値段の安さを知る。（資料3）

②自分の考えを書く。

(3) 実践の実際と子どもの反応

① 学習の見通しをもたせる（予想を立てる）

授業の導入段階で輸入という語句を確認した。その後、「輸入する食料の量は昔に比べて増えていると思う？減っていると思う？」と発問した。児童の反応はほとんどが「増えている」と答えた。その後、グラフ1を提示した。全ての児童に資料の内容を確実に理解させるため、縦軸、横軸が表しているものを全体で確認して進めた。そのため、どの児童も、昔に比べると輸入されている食料が増えていることが理解できていた。

学習を通して、どのような食べ物が輸入されているのかに話題が膨らんだ。輸入牛やエビなど、これまで買い物に行った時などの経験から口々に食材を挙げていた。

次に、米、野菜、牛肉、大豆、魚、小麦の6種類の主要な食料に絞って、どのくらい国内で生産されているか予想した。子どもたちは、日々、食卓にのっている食べ物であることから、ほとんどが国内で生産されていると考えた。資料1と関連させて、輸入されている食料が増えているのであるから、輸入品もあるのではというつぶやきも聞かれた。結果として34名中10名の児童が挙手をして、自分の予想を発表した。野菜と米は9割が国産と予想する児童が多く、その他の食料も5～7割程度は国産だろうと答えた。

② 提示資料の工夫（思考を促す資料の提示）

クラス全体の意見として野菜や米は国産であるとクラスの見解としてまとめたあと、資料2の読み取りをさせた。すると、以下のようなつぶやきも聞かれた。

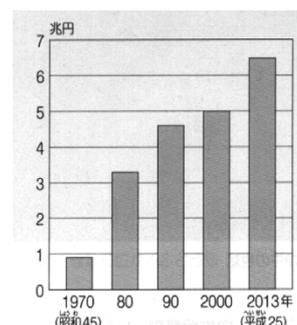
- C1：やっぱり米と野菜の多くは国産だ。
 C2：小麦、大豆が少ない。他のものに比べるとこの2つが少ない。
 C3：野菜に似ているのに、小麦と大豆が少ない。日本が小さいからかな。
 C4：外国産ってわかったら食べたくない。なんか危険とか言ってた。

児童の発言から、大豆と小麦の国産の少なさ、輸入量の多さへの理解に学びが深まった。グラフから傾向や変化などの情報を集めることができている。また、C2の「他のものに比べると少ない」は、輸入量の多さが顕著である2品目に注目した発言である。「野菜類の輸入はそこまでしていないだろう」というこれまでの思考のずれが生まれ、その理由を考えるために思考が深まる場面である。

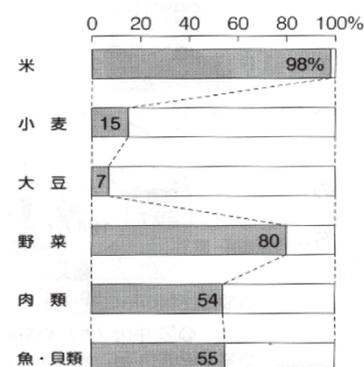
以下は、その他の児童の記述である。

- (その他の児童のワークシートの記述から)
- ・大豆と小麦が意外と輸入されている。
 - ・思ったより輸入が多い。
 - ・米は全部国産だと思ったけど、外国産もあるんだと思った。
 - ・大豆はみそ、豆腐を作るのに必要だけど、少なくて大変だと思った。
 - ・大豆は味噌汁（和食）に入っているのにほとんどが輸入でびっくりした。

記述の中には、輸入量の多さが顕著であった大豆と小麦だけでなく、輸入量の少ない米についての記述もあった。自分たちにとって身近な米が日本以外の国から輸入されていることに驚いていることが伺える。資料の特徴的な部分だけでなく、数%の細かいところまで読み取り、「なぜその数値になっているのだろう」と考えを深めようとしていた。また、結果として、パンやスパゲッティ用の小麦は、日本の気象条件では作ることが難しいことや、大豆は地域ごとの単収のばらつきが多いことにより、輸入による安定した供給が必要であることを学ぶことができた。そのことから、必要なら作ればよいと考えていた自分たちの考え方で解決できないために輸入していることが分かり、その中で自分たちはどのように輸入食材に向き合うべきなのかについて、思考のずれを修正し考えを深め始めた。



グラフ1 日本の輸入額の変化
 「小学社会5上」教育出版
 (p.96)より転載



グラフ2 日本の品目別輸入率
 「小学社会5上」教育出版
 (p.96)より転載

その後、掲示した食料のイラストを農林水産省ホームページで調べた自給率に合わせて切り取って見せた。(写真1)「もし輸入ができなくなったら」を視覚的に示すねらいである。

児童は、食卓を思い浮かべながら様々な反応をした。学習内容に興味を持つとともに、視覚的に自給率の低さを理解していた。

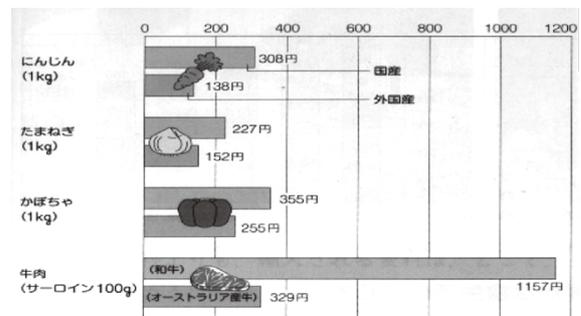
続いて、その後輸入が増えてきた理由を考える資料として、①国産と外国産の食料の値段を示したグラフ(資料3)②外国の大規模農業の様子を表した写真、の2つを提示した。外国の食糧生産の違いや、輸入品の安さという児童の知らない情報を与えることで、児童の考えを広げるねらいがあった。「なぜ食料の輸入が増えてきたのか」という発問には、次のような記述が見られた。



写真1 授業の板書

- ・グラフの内容(輸入品の安さ)に注目した記述…34人中6人
- ・既習内容を使った記述(農家が減ってきたなど)…34人中14人
- ・国土についての記述(外国の方が広いからなど)…34人中15人
- ・その他(外国との関わりが増えたからなど)…34人中8人 (複数回答あり)

輸入が増えた理由について、ほぼ全ての児童が上記内容を生かした感想を記述した。グラフを読みとったものより、既習内容を使った記述や国土についての記述が多かった。これは、グラフの内容よりも、写真や友達の発言を受けて記述している児童が多いからだと考える。これは、学習指導要領の目標の(2)「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える」につながる。輸入が増えた理由について1つの見方だけでなく、様々な視点から考えることができていた。



グラフ3 輸入品と国産品の価格比較

「小学社会5上」教育出版(p.97)より転載

③ 授業展開の工夫(関わり合いながら学ぶ場の設定)

授業の流れは、発問→予想→資料の読み取り→共有の順序で構成した。友達の意見やつぶやきを参考にして、子どもの新たな思考を促すためである。途中、小グループで意見を交流させる場を設定し、思考を促した。資料3の提示の後の「なぜ輸入が増えてきたのか」という発問に対してのやり取りを聞いた子どもたちの記録物に変化がみられた。

- T1: なぜ輸入が増えたのでしょうか。
 C5: 日本には土地がないから作れない。
 C6: 昔より外国とのかかわりが増えたから。
 C7: 高齢化で作る人が少なくなってきた。

- T2: 似たことを学習していたね。
 C8: 漁業もそうだよ。
 C9: 制限がなくなったから。
 T3: グラフからわかることはない?
 C8: 外国産の方が安いから

C5～C7の児童は、自分の知識(既習内容)から考えを述べていた。また、C7の発言は5年生で学んだ農業における後継者不足の問題からの発言である。より児童の考えを広げるためにT2の発問を行った。

T2の発問からこれまでの学習(農業や漁業)と結び付けて発言する児童も出てきた。既習の内容と結び付けて発言することは、これまでの授業ではあまり見られない姿であった。これは、学習指導要領の第5学年の目標(2)の「考えたことや選択・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力」につながると考える。1つの視点だけでなく、課題について多角的に考え、それについて自分の考えを発表したり、友達の考えを聞いて反応したりして学びが深まっていることがわかる。また、学習課題に向かって考えようとする意欲が見られたともいえる。日本の食料自給率の低さに驚いたことで、「なぜだろう?」という気持ちが生まれ、学習意欲につながっていったと考える。

ただ、資料の読み取りから離れてしまう様子が見られたため、T3の発問で資料に立ち返らせた。以下はその他の児童の記述である。

(その他の児童のワークシートの記述)

- ・農業をする人が減った。
- ・足りないから輸入している。
- ・日本の畑や田んぼが小さくて、外国が大き
く、1回にいっぱい取れるから。
- ・日本は災害が多いから(台風や地震)。

ワークシートの記述の中にも、日本の災害の多さや後継者不足など、既習の内容を根拠に自分の考えを書く児童が多かった。資料1から輸入が増えていることについて読み取り、「どうしてだろう」と考えたときに、既習内容を利用して考えを記述しようとしたことが分かる。外国の大規模農業の様子と日本の農業を比較して、外国の方が収穫できる量が多いことを読み取った児童もいた。資料に立ち返り、自分の考えを書いていることが分かる。

また、単元の3時間目に、単元のまとめとして「食料を安定して手に入れるために、自分ができることを考えよう」というめあてを立てて、授業を行った。この授業を通して、児童がこれまでの学習を生かして、自分だったらこうするという記述を具体的に書くことを期待した。以下はその時の記述である。

(児童の記述)

- ・スーパーで買うとき、どこで作られたものか見る。
- ・国産のものをできるだけ買う。
- ・直売所で売られているものを買う。
- ・地元で売られているものを地元で買う(地産地消)。
- ・もし農家の立場だったら、直売所や地元の店に売る。

「なるべく日本の物を買う」という記述から、自給率の低さを理解した上で自分にできることを考えていることが伺える。これは、学習指導要領の第5学年の目標(3)の「よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養う」という点と関係している。これまでの学習を想起し、身近な生活に生かせる方法を考えることができていた。このことから、食料自給率の低さについての学習が児童の印象に残り、考えを書くための根拠になっていることが分かる。授業を通して学習成果を基に生活の在り方について考えようとする姿が見られた。一方、記述が児童にとっての「よりよい社会」は日本国内の、しかも自分の身近な生活に関わることに限定されていることも感じた。授業においてまずは身近な社会を意識することを基礎に、外国の製品を買う理由や買わざるを得ない事情も意識させ、より国際社会に目を向けていく必要性を感じた。このことが、新学習指導要領における社会科のねらいである、社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会を主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することにつながるのだと感じた。

4 考察・今後の課題

(1) 学習の見通しをもたせる(予想を立てる)

実践では、身近な食料の食糧自給率を予想させてから、答えを見つける形で資料を提示した。予想したことで食料自給率の低さをより児童が感じ取り、その後の理由を考える学習で自分の考えを多様な観点から書くことができていた。そのことから、すぐに資料を提示するよりも予想を立ててからの方が読解能力を高めるために有効だったといえる。

児童の記述の中で、「思ったより」や「意外と」、「予想と違って」などの記述が多く見られた。これは、グラフの数値からどういうことが言えるのかを読み取った上で、自分の予想と比較して考えを書いていることが伺える。生活経験を振り返りながら予想を立てさせたことで、児童の驚きを引き出すことができた。また、グラフを「利用」して考えようとするなど、児童の学習意欲の高まりに効果があったといえる。児童の反応から、予想をグループで話させたり、理由を挙げて説明させたりする活動を入れることにより、その後の活動で、より自分の考えと比較して「なぜだろう」と食料自給率が低い理由を考えるのではないかと考えた。今後活かしたい。

(2) 提示資料の工夫(思考を促す資料の提示)

実践では、食糧自給率のグラフを提示した時に「思ったより少ない」や「予想と違って」という発言や記述、どうしてだろうと資料を読み取ろうとする様子などが見られた。身近な食料が外国に頼っているという事実を知り、児童の中で「なぜ?」という探求心が生まれ、その後の資料の読み取りにつながっていった。発言の中でも、「日本が小さいから」など、自分の考えを付け加えて発言する児童がいた。これは、自分の予想との違いから「なぜだろう?」と考え、その理由を考察しようとした姿の表れであると考えられる。

PISAの読解力の定義でいう「熟考」では、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりする

ことが求められている。今回の提示資料の工夫（3）②からは、既習内容を使った記述が34人中14人、国土についての記述（外国の方が広いからなど）34人中15人、その他（外国との関わりが増えたからなど）34人中8人というように、輸入が増えた理由について1つの見方だけでなく、様々な視点から考えることができていた。児童が自ら詳しく資料を読み、読むことを通して思考のずれを修正していくという、自己の学習活動を振り返って次につなげる主体的な学びに結びついてきたように感じる。また、輸入品と国産品の値段の差など、児童に身近な買い物に関わる資料を提示したことで、ただ買うだけでなく、商品の値段や産地をより意識して買わなくてはいけない、というこれからの生活に関わる気付きを生むことができた。この点からも、思考のずれを生む資料は学びを深めるために有効であったといえる。課題としては、単元のまとめの記述から国産の物を買う良さだけが印象に残り、どうして輸入しなくてはいけないのかということがあまり見られなかった。多角的な視点のため、学んだことを根拠に記述させたり国産と輸入を自ら主体的に考えた上で購入することなどに気付かせたりする必要がある。

（3）授業構成の工夫（関わり合いながら学ぶ場の設定）

実践では、輸入量の増加を示したグラフの後に、食糧自給率の低さを提示し、最後に外国産の値段の安さやその根拠となる大規模農業の資料を提示するという流れで授業を構成した。そうすることで、輸入が多くなってきた理由を考えると、「日本は外国と比べて狭い」や「外国産の方が値段が安いから」という考えを引き出すことができた。児童の「なぜだろう」という気持ちを保ったまま、資料の読み取りに活動をシフトすることができたといえる。ただ、児童の発言の中で、自分のもっている知識のみで考えを書く児童が見られた。もちろんもっている知識から予想することは学習の方法の一つではあるが、資料から読み取ったことを生かして考えを書くことが学びを深める要因である。そのため、資料を提示するタイミングをもう少し後にして、児童の思考が行き詰った時に資料を提示することで、資料の内容をより印象付けることができたのではないかと考えた。授業展開のさらなる工夫によって、児童の考えを揺さぶったり資料に立ち返らせたりすることができる。

5 おわりに

主体的・対話的で深い学びのためには、学習意欲の喚起が必要不可欠であることを感じた。児童が主体的に学ぶような社会科の授業を作っていく際に、教師の用意する資料が何を意図しているか、また資料を出すタイミングを意識することが必要である。それによって、児童の反応や発言は変わることを実感した。これからは、児童から考えを引き出した後に資料を提示したり、様々な種類の資料やグラフを読み取らせたりすることで、さらに資料を読み取る力や学びを深める授業をしていきたい。また、資料の読み取りだけでなく、友達の考えを聞いて発表したり議論したりといった学習形態も大切にしたい。社会科における多角的な見方を身に付けるために、友達の考えと比較したり共感したりすることは、主体的・対話的で深い学びにつながることを実感した。本実践で見えた要因を、これからの授業づくりに活かしていきたい。

（参考文献，資料）

- ・有田和正『社会科 授業の教科書』さくら社，2012年
- ・有田和正，石弘光ほか「小学社会 5上」教育出版，2014年，pp.96-101
- ・伊東良枝「小学校社会科における子どもの資料活用能力を高める授業改善研究－第4学年「水はどこから」の実践を通して－」『教育実践研究第25集（2015）』，上越教育大学，学校教育実践センター，2015年，pp.37-42
- ・農林水産省『日本の食料自給率』
https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/012.html，2019年
- ・文部科学省『資料4－9 PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向』
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryo/1379665.htm，2006年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』，日本文教出版，2018年
- ・文部科学省・国立教育政策研究所「OECD 生徒の学習到達度調査2018年調査（PISA2018）のポイント」
https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf，2019年
- ・文部科学省・国立教育政策研究所「OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）～2018年調査国際結果の要約～」
https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/03_result.pdf，2019年